阿佐ヶ谷教会

Vol. 63-No. 06



信友会会報

2012年1月

<<11 月例会より>>

信友会11月例会は名誉牧師の大宮溥名誉牧師を迎え、「日本のキリスト教」について語っていただきました。

多くの宗教が並存している日本社会にあって、キリスト教を救済史的な視点から述べ、私たちキリスト者としての生き方について共に考える時をあたえられました。

信 友 会 11 月 例会

 大宮 溥

日本のキリスト教伝道と教会の現状

日本のキリスト教は、シャヴィエルが鹿児島に到着した1549 (天文18)年に始まりましたが、1612 (慶長17)年に徳川家康がキリシタン禁止令を出し、1638 (寛永15)年の島原の乱以後ほとんど断絶しました。近代に入って(ベッテルハイムの那覇上陸は1846 < 弘化3>年ですが)1859 (安政6)年プロテスタント宣教師の来日以来、150年を経過しました。

2011 年のキリスト教人口はプロテスタント 657,272、カトリック 441,592、オーソドックス 10,380、総数で1,121,694 と推定され (『キリスト教年



鑑』による)、日本における人口比は 0.8880 といわれています。そのうち、日本基督教団は、信徒数 182,418、現住陪餐会員数 90,184、礼拝出席者 1 主日平均 56,240 であります。ある人は日本では宗教信者の数え方が曖昧で、元日などに神社仏閣を訪れる人さえ信者と見なすので、そのように考えると、キリスト教に関心をもっている人は全人口の 30%位になるという人もいます。このような日本社会の状態において、キリスト教が他の宗教と共存して歩んでゆくにあたって、他宗教をどのように考え、その信者の人たちとどう接していったらよいのかについて、考えたいと思います。

宗教的複合社会の中でのキリスト教

日本社会はこれまでも宗教的複合社会でしたが、今日グローバル化が進行して、かつてはキリス

ト教社会といわれていた欧米社会でも、イスラム教、アジア起源の諸宗教の信者が多く住みつくようになり、宗教的複合社会になりました。そこで、キリスト教界でも、キリスト教と他宗教の関係をどのようにとらえるかという「宗教の神学」が、真剣に論じられています(一例として、古屋安雄『宗教の神学』1985年)。大きく分けると、①宗教的多元主義、②排他主義、③包括主義という三つの考え方があります。

第1の「宗教的多元主義」 religious pluralism は、宗教を、それぞれその背後にある「神的なもの」がそれぞれ の個別性においてあらわれ 出たものであるから、各個宗教は他の宗教も自分たとと同等の基礎を持つものるとして受けとめるべきであるとと オえる立場です。ジョン・は すくの名をもつ」と述べています。



第2の「排他主義」

exclusivism は、キリストの救い以外のものは、すべて偶像礼拝であるとして、排除するもので、この立場を非常に鮮明に打ち出している人としては、カール・ブラーテンなどがあり、彼には『二つとなき福音』No Other Gospel という著作があります。

第3の「包括主義」inclusivism は、キリスト教の救いと啓示に神の働きの中心的な意義を認めるのですが、他の宗教にも霊的な力と愛の働きを認めるもので、プロテスタントのパウル・ティリッヒや、カトリックのカール・ラーナーなどが代表的で、ラーナー(第2ヴァテイカン公会議の指導的な神学者)は「他宗教信者も匿名のクリスチャン anonymous Christians である」と言いました。

救済史における福音と諸宗教

わたくしは上記の3つの立場のうち、第3の「包括主義」に親近感を覚えます。わたくしは幼年期に燃料工場を経営していた父が、毎朝職場で神道の礼拝をしていたその敬虔さに感銘をうけて、その礼拝を真似て遊ぶようなことがありました。父の死後は、母が毎晩浄土真宗の「おつとめ」(勤行)をするのに加わって、小学生でしたけれど「他力本願の浄土真宗の信仰」(プロテスタント的な信仰義認の教えと共通するものがあります)を植えつけられました。第二次世界戦争が終わったとき、日本国民の民族的な懺悔と新生が求められる中で、私は兄が送ってくれた矢内原忠雄先生や賀川豊彦先生の著作に触れて、キリスト教に導かれました。香川県の多度津教会で洗礼を受けましたが(1948年12月15日)、その決心を母に話しましたところ、熱心な仏教徒であった母は、家族が仏教の浄土とキリスト教の天国に分かれるのは困ると真剣に訴えました。わたくしは当時旧制中学の3年生でしたが、母に対して、浄土とか天国とか言うけれども、人間を生まれさせ、死後この世から引き取る力(神の力)は、人間すべてに共通だと思う、と答えました。そして、その力の根源について、自分に最も納得のゆくお方を信じ受け入れる事は、自分と親兄弟を離すことでなくて、そのつながりを作ってくれる方に導かれることになると思うと話しました。それを聞いて、母はわたし

の受洗を認めてくれ、その後自分も洗礼を受けました。そのような自分の宗教経験からも、わたし は諸宗教に関して、包括主義的な理解をもっています。

聖書は宗教をどのように取り扱っているでしょうか。聖書は世界を「救済史」の展開の場として 理解しています。

- ① 造された世界は「原始的無垢の状態」でした
- ② しかし失楽園物語によって示されているように「堕落」して「神との関係の断絶」が起こりました。
- ③ それにもかかわらず、それ以後の人間も、神を呼ぶ「宗教」を持っていました(創世記4:26)。
- ④ その中で特に神の選びによって「イスラエルの宗教」が興り、旧約(古い契約)の歴史が展開 します。
- ⑤ イエス・キリストによって、神と人間との契約はイスラエル民族から世界へと展開し、新約(新 しい契約)の歴史が展開します
- ⑥ 終末において神の国が完成し、万物の回復が起こります。それは宗教の完成であり、終わりであります(ヨハネ黙示録 21:22)。

このような「救済史」において、神と人間との救いと交わりを完成するのは、受肉者・仲保者であるイエス・キリストであります。そしてキリスト教はキリストが顕在的に人間と交わる「内円」であり、ユダヤ教は神と人格的に交わる「外円」、それ以外の諸宗教は神の創造の恵みと霊性に与る「外外円」です。したがって、キリスト教と諸宗教とは類比関係にあり、キリストは諸宗教の完成であり、宗教者は「匿名のキリスト者」(K. ラーナー)であります。

日本的霊性とキリスト教

鈴木大拙はその著『日本的霊性』において、日本人の霊性が知性的に現れたのが「日本人の生活の禅化」であり、それが情性的に顕現したのが「浄土系経験」であると述べています。そして、このような宗教史的な経験は、日本民族が本来持っていた霊性が、仏教的なものに触れて、自己展開したものだと述べています。「初めに日本民族の中に日本的霊性が存在していて、その霊性がたまたま仏教的なものに逢着して、自分の内から、その本来具有底を顕現したということに考えたいのである。ここに日本的霊性の主体性を認識しておく必要が大いにあると思う」(岩波文庫 65 ページ)。人間の霊性の歴史として見ると、このような理解ができると思いますが、神の救済史として見ると、仏教の展開の奥にキリスト教的な救済の展開があります。禅宗的な霊性はカトリック的な神秘体験と相通じるものがあり、浄土門(浄土宗、浄土真宗)の「他力本願」の信仰はプロテスタントの「信仰義認」の教理と親近性があります。仏教は神秘主義的な性格が強く、宇宙的な万物の融和の世界に生きようとしますが、キリスト教は人格主義的な性格が強く、神と人、神と共同体、との人格的な出会いによる救済史的な展開を軸に生きようとします。

わたしの恩師の熊野義孝先生は、宗教とは神と人との交わりの「媒介」mediumであるのに対して、キリスト教は「媒介者」「仲保者」mediatorであるキリストを仰ぐものとして、諸宗教の完成という面があることを指摘しておられます。

日本におけるキリスト教は、今なお少数者の共同体 minority community ですが、救済史の内円にあるものとして、その外円、外外円にある人々に対して、諸宗教の完成としての人類救済の福音を一層熱心に伝道してゆかなければなりません。それと同時に、キリスト教は他宗教を敵として対決するのでなく、神と人間との霊性の交流を果たすものとして、日本における霊性の深化のために、それぞれの立場で奉仕してゆくことを心がけなければならないと思います。